

動詞「調」字の受容について

——漢字サ変動詞「てう（調）ず」の成立と関わらせて——

柚木靖史

はじめに

本稿では、漢字の「調」のうち、特に動詞を書き表す「調」を対象に、漢字受容という観点から、中国と日本との意味の違いや、日本における意味の変遷について考える。以下、動詞を書き表す「調」を、動詞「調」字と表記する。

また、動詞「調」字については、「てうず（調ず）」が、和語を主体として表現される和文資料である『源氏物語』等に多用されることから知られるように、漢語サ変動詞の語基として使用される漢字である。そこで、この漢語サ変動詞「てうず」の成立についても、中国古典文献の動詞「調」字と日本文献との比較をとおして検討したい。

さて、動詞「調」字は、古代中国において、多義的に使われた漢字であった。『字統』によれば、「説文」三上に、「𢇛^わ（和

するなり」（段注本）とあつて、調和の意とする。「詩、小雅、車攻」^{しゃこう}「弓矢既に調ふ」^{ととの}のように、和適の状態となることをいう。その和適の状態が過ぎると、多言となり、調笑となり、^{ちよう}調^{ぎやく}謔^{ぎやく}となつて、嘲弄の意となる。調はまた、^{ちよう}嘲^{ちよう}・^{ちよう}嘲^{ちよう}と通じ、欺弄の意をもつ。租庸調に用いる調は、おそらく「徴^{*}」（徴）の意であろう。召されて栄転するのを調召・調遷という。調度の調も徴の意で、予定を立てて準備すること、ことに武器などを調達する意味に用いる。調達は阮籍^{げんせき}の「楽論」に「陰陽調達す」のように、調和の意も含めた用法もあるが、もと、ものをえらび調える意である。」とされる。^{（注1）}このように、古代中国において「調」は、「調和する」「嘲弄する」「栄転する」「準備する」といった意味があったと説かれる。

一方、日本の古辞書である『色葉字類抄』によつて、動詞「調」字がどのように読まれていたかを見ると、「ト、ノフ」「ツクロフ」「エラブ」「アフ」「シタ、ム」「シラブ」の読みがみら

(注2)
れる。

『色葉字類抄』に記された「調」の訓のうち、「ト、ノフ」「エラフ」「ツクロフ」「シタ、ム」は、「整える」という意味で使われた「調」を、それが出現する文脈に応じて、読み分けられたものであろう。例えば、奉納する衣装を修繕し整える場面では「ツクロフ」と読まれ、奉納する品物を「選び整え準備する」という場面では「エラフ」「シタ、ム」などと読まれたのであろう。ただ、「シラフ」は、「調査する」という意味ではなく、「演奏する」という意味であらう。「調査する」という意味の「シラフ」が成立したのは、『日本国語大辞典』（小学館）の初出例によれば、近世以後のことなのである。なお、「演奏する」という意味も、音色を「整える」という意味では、「整える」の意味に含めて考えることもできる。このようにみると、古辞書の「調」の訓を見る限り、動詞「調」字には、複数の訓が存するものの、いずれも「整える」という意味の「調」が、文脈に応じて読み分けられたと見ることができるといえる。

1 上代・中古における動詞「調」字の意味

1—1 『古事記』『日本書紀』

ここでは、日本の上代文献のうち、『古事記』(注3)『日本書紀』(注4)の動詞「調」字の意味を検討する。

『古事記』にみられる、動詞「調」字は、次に示す一例だけである。次に示す1の動詞「調」字の主体は履中天皇で、対象は八絃琴である。ここでの「調」は、「演奏する」という意味であらう。ただし、「演奏する」という意味は、「(音を)整える」という意味であると解釈することもできる。

1 末押摩魚簀 如_レ調_二八絃琴_一、所_レ治_二賜天下_一（下
卷 清寧天皇 356頁8行目）

『日本書紀』には、動詞「調」字が、三例認められた。

- 2 即巧_レ言而調_二暴神_一。（卷第七 景行天皇 ①372頁7行）
- 3 則被_二神恩_一、頼_二皇威_一、而叛者伏_レ罪、荒神自調。（卷第七 景行天皇 ①384頁3行）
- 4 是以陰陽開和、造化共調。（卷第二十二 推古天皇 ②554頁7行目）

2の「調」の主体は「日本武尊」で、対象は「暴神」である。用例は、言葉を巧みに使って、荒ぶる神を沈めよという意味である。ここでの「調」は、荒ぶり乱れたものを「整える」という意味である。3の「調」は自動詞で、主体は「荒神」である。用例は、神恩を被り、天皇の威光によって、反逆者を罪に伏さ

せ、荒ぶる神は、自然と落ち着いたという意味である。ここでの「調」は、荒れ、乱れていた状態が、「整う」という意味である。4の「調」は自動詞で、主体は「造化」である。用例は、陰陽が調和し、天地が「整う」という意味である。

このように、上代文献の『古事記』『日本書紀』の動詞「調」字には、「整える」「整う」「演奏する」の意味が認められる。「整える」の意味と「整う」の意味は、他動詞と自動詞の対応関係にある。

1—2 古文書・古記録

以下に示すように上代や中古の古文書や古記録にも、『古事記』『日本書紀』と同様に、「整える」「整う」「演奏する」という意味の動詞「調」字が使われる。^(注5)

(1) 「整える」という意味の「調」

- 1 以前経、依無於一切経内、欲奉調圖書寮経探求（経本装潢充帳 №152 10／281 編年文書 天平二十年五月二十七日 282頁）
- 2 辰時従彼府調陣食送本陣、々官等食之（小右記 天元五年正月十七日 7頁）
- 3 檜破子非参議别当及所々職事等各令調、如在檜破子籠

物十捧許。（小右記 寛和元年正月三十日 78頁）

4 公卿等祿、中宮有可令調給了仰。（小右記 寛和元年三月二日 85頁）

5 戊午、此夜供餅、左衛門督調之。左衛門督供御帳中、後供御膳（御堂関白記 寛仁元年十一月二十四日 125頁）

1の例は、一切経が欠落しているので図書寮の経を探し、経を整え申し上げるという内容である。よって、ここでの「調」の意味は、「整える」である。2の内容は、彼の府より陣食を整えて、本陣に送るという内容である。ここでの「調」も「整える」という意味である。3の内容は、非参議别当及び所々の職事等が、檜破子を整えさせ、檜破子や籠物を十捧許ほど整えさせたという意味である。ここでの「調」も、「整える」という意味である。4の内容は、公卿等が、童の祿を中宮にお整えさせになったという意味である。ここでの「調」もまた、「整える」という意味である。5は、左衛門督が供餅を調え、御帳の中に供えるという内容で、ここでの「調」も「整える」という意味である。ここでの「調」は、目的語が食物なので、「調理する」という意味に解せないことはないが、左衛門督自ら、餅を作つて用意したとは考えにくい。ここでの「調」も、他の「調」と同じく「整える」の意味で、作られたいくつかの餅を、供物用に整え、帳中に供えたという意味と解する。

(2) 「整う」という意味の「調」

1 今日不供解齊御粥、依仰事也。日来玉体不調。不着御々膳、仍件膳不令俗給歟（小右記 長和四年六月十二日 38頁）

2 廿二日、己巳、昨日戊剋左大臣參内、進退不調。仍乘車。於陣下々之、子息両納言、相扶入陣之間、（小右記 長和四年七月二十二日 61頁）

3 次打鍾、諸僧參入、証者權僧正慶命、講師大僧都心譽、少僧都遍救・定基・明尊・永照・法眼教門、律師融碩・経救、已講済慶、阿闍梨源心、聴衆二十人、梵音樂十人、錫杖十人、以聴衆五十一口法服皆調（小右記 万寿四年八月二十三日 20頁）

4 付香拳灯明、白事由權【於カ】三宝、堂僧時剋吹螺新螺未調不快。（御堂関白記 寛弘二年十月十九日 163頁）

1の例は、「天皇に御粥を差し上げなかった。数日来、体調が整わないから、膳につかれなかった」という意味である。ここでの「調」は、「整う」という意味である。ただし、「不調なり」のように、「調」を、動詞ではなく、「不調」という熟語の一部とすることも可能ではある。2の例は、「左大臣が、進退の自由が利かなかつたので、子息に助けられ車で参内した」という内容である。ここでの「調」も「整う」という意味であろう。な

お、ここも「調なり」という読みも可能ではある。ただし、その場合でも、「調」自体の意味は「整う」と考えてよいであろう。3の例は、法成寺釈迦堂供養始で、諸僧が参入した様子を、僧名等、具体的に書き記した内容である。聴衆五十一口の法服が皆、整ったということを表す。よって、ここでの「調」は、「整う」という意味である。4の例は、三昧経供養において、新しい法螺の音が整っていなかったため、不快であったという内容である。ここでの「調」の意味も、「整う」である。

「整える」は他動詞であって、「整う」は自動詞である。衣裳や人物などが、「調」の目的語となると、「調」は、「整える」という意味になる。古文書や古記録の、動詞としての「調」は、この「整える」と「整う」という二つの意味で解される。もつとも、二字では「調伏」といった熟語を成す場合もあるが、動詞「調」字は、後に示すような「演奏する」という意味を表す「調」が若干例認められる以外は、古文書や古記録では「整う」「整える」の意味に限られると言つてよい。

(3) 「演奏する」という意味の「調」

1 此間諸大夫等取菅円座令敷簀子敷、其後殿下以下着座、召人座設南階東、置糸竹等、各調管曲。（後二条師道記 寛治七年二月 40頁）

2 以弁山階寺大衆事奏聞、召衆人時元、左府生、笙・笛を令調。(殿曆 長治二年八月 92頁)

1は、公卿らが管曲を演奏したという内容である。ここでの「調」は、「演奏する」という意味である。本来は、音色を調えるという意味であろうが、ここでは、楽器を目的語に取っているので、「演奏する」という意味である。2は、衆人を召して、笙や笛を演奏させたという内容である。ここでの「調」も、「演奏する」という意味である。

このように、上代から中古にかけての古記録や古文書の動詞「調」字には、「整える」「整う」「演奏する」という意味が認められる。これは、上代の『古事記』や『日本書紀』での動詞「調」字の意味と違いは見られない。したがって、日本の上代から中古では、動詞「調」字の意味は、「整える」「整う」「演奏する」の三種であったと考えられる。ただし、「演奏する」と「整える」は、全く違う意味のようにも見られるが、基本的な意味は同じであろう。「演奏する」というのは、単に楽器の音を出したり、複数の楽器で楽曲を奏でたりするという意味ではなく、おそらくは、複数の楽器の音を「整える」というのが、基本的な意味であろう。こう考えると、日本における、上代から中古にかけての動詞「調」字の意味は、他動詞としての「整える」の意味と、自動詞としての「整う」の意味とに、大きく二分さ

れると考えてよからう。そうだとすれば、日本における上代から中古にかけての動詞「調」字の意味は、多義性を呈するような、複雑なものではなかったということになる。

2 中国古代文献における「調」の意味

次に、中国古代文献として、『史記』^(注6)『漢書』^(注7)『文選』^(注8)を対象に、動詞「調」字の意味を考えてみたい。ここで、『史記』『漢書』『文選』を取り上げるのは、いずれの文献も、古く日本国見在書目にその名が見えることから、日本語の漢字表記の成立に、影響を及ぼした文献である可能性が存すると考えられるからである。

2-1 史記

『史記』の動詞「調」字には、次の例のように、「調べる」「整える」「任命する」「昇進する」「整う」の意味が認められる。

(1) 「調べる」という意味の「調」

1 令益予衆庶稻可種卑湿、命后稷予衆庶難得之食、食少調有余相給、以均諸侯。(一 本紀 76頁5行目)

1 は、食物が少ない時は、食物が余っているところを調べて、供給するという意味である。ここでの「調」は、「調べる」という意味である。

(2) 「整える」という意味の「調」

1 費皆仰給大農、大農以均輸調塩鉄、助賦。故能贍之。

(四) 八書 305頁7行目

2 推五德之運、以為漢當水德之時、尚黑如故、吹律調樂、入之音声、及以比定律令若百工、天下作程品。(十) 列伝

三 張丞相伝 256頁2行目

3 所謂氣者、當調飲食、扱晏日、車歩広志、以適骨肉・血脈、以瀉氣。(十一) 列伝四 扁鵲倉公列伝 227頁1

2行目

4 晷時家居。詔召入見。上方與鼂錯調兵竿軍食。(十)

一 列伝四 袁鼂鼂錯伝 264頁3行目

1 は、「大農は、均輸でもって、塩鉄を整え、賦税を助けたので、要求された費用を満たすことができた」という内容である。ここでの「調」は「整える」という意味である。2 の「調樂」は、「音楽を整える」という意味で、ここでの「調」の意味も「整える」である。3 の「所謂氣者、當調飲食」とは、「気なる

者は、飲食を整えるべきである」という意味で、調和のとれた飲食をすべきであると説く。ここでの「調」の意味も、「整える」と考える。4 の「調兵」は、「軍兵を整える」という意味であると解する。ただし、テキストとした『新釈』の注釈によれば、「調兵」を「軍隊を派遣する」という意味に解する。ここでの「調兵」は、文脈上、戦に備えて軍隊を整えるという意味に解することができる。ここでは、他の「調」の意味と同じく、「整える」と解する。

(3) 「任命する」という意味の「調」

1 然袁鼂亦以数直諫、不得久居中、調為隴西都尉。(十)

一 列伝四 袁鼂鼂錯列伝 16頁1行目

1 は、然袁は、直諫があまたあり、中央で久しくとどまることができず、任命されて地方の隴西都の尉になったという意味である。ここでの「調」は、「任命する」の意味である。

(4) 「昇進する」という意味の「調」

1 張廷尉釈之者、堵陽人也。字季。有兄仲同居。以嘗為騎郎、事孝文帝。十歲不得調。無所知名。(十一) 列伝

四 張釈之憑唐列伝 47頁1行目)

1の「十歳不得調」とは、張廷尉釈之が、十年間、昇進することがなく、名前も知られなかったという意味を表す。ここでの「調」は、「昇進する」という意味である。

(5) 「整う」という意味の「調」

1 太史公曰、故旋璣玉衡、以齊七政、即天地、二十八宿、十母、十二子、鍾律調。(四 八書 120頁3行目)

2 故曰、琴音調而天下治。(史記六 世家中 764頁10行目)

3 夫樂調而四時和。(史記七 世家中 918頁3行目)

1は、太史公が言うには、「旋璣玉衡を考えて、七政のことを知った。すなわち、二十八宿、十母、十二子、鍾律が整っていることなどである」という内容で、ここでの「調」の意味は、「整う」である。2は、「琴音が整って、天下が治まる」という内容で、ここでの「調」の意味も、「整う」という意味である。3は、楽が整えば四時が和するという内容で、ここでの「調」も、「整う」という意味である。

以上の意味のうち、「整える」「整う」は、日本の動詞「調」

字にも見られるが、他の「調べる」「任命する」「昇進する」という意味は見られない。また、日本の動詞「調」字に見られたような「演奏する」の意味は、『史記』には見られない。ただ、「整える」の意味の用例2「調楽」は、「音楽を整える」という意味として解することができるが、「演奏する」の意味とも重なる。先に、日本の動詞「調」字は、「整える」「整う」に二分される。「演奏する」は、「整える」と基本的には意味が同じであることを述べたが、『史記』の「調楽」が「音楽を整える」と解され、この意味はさらに「音楽を演奏する」の意味にも解されることも可能であることから、日本の動詞「調」字に見られる「演奏する」という意味は、中国の動詞「調」字の「整える」の意味に解される「調楽」(楽を整える)のような例が受容されたのであろう。

このように、日本の動詞「調」字と『史記』の動詞「調」字の意味を比較すると、「整える」「整う」の意味だけが共通することから、日本の動詞「調」字の意味は、『史記』の動詞「調」字の意味に含まれることになる。よって、日本の動詞「調」字には、日本で独自に作られた意味は存せず、また、「任命する」「昇進する」という意味は、日本では、動詞「調」字の意味として定着しなかったということになる。このように、中国の動詞「調」字の意味は、例えば、「整う」と「昇進する」の関係のように、一見ただけでは両者の意味に共通点が見られないよう

な、別義ともいえる複数の意味が存するのであるが、日本の動詞「調」字は、中国の動詞「調」字の複数の意味のなかから、「整える」「整う」だけを選択している。この選択は、表記の複雑さを避けるという点で、きわめて合理的な受容の仕方であったといえる。動詞「調」字が、共通性のない複数の意味を表わし得るとなれば、そこに解釈上の混乱が生じる恐れがあり、また、表記においても混乱をきたす恐れが生じると考えられるからである。

ただ、現代の常用漢字の動詞「調」字の読みには、「しらべる」がある。この点、上代から中古にかけての資料中の動詞「調」字に「調べる」の意味が見いだせなかったのは不思議である。さらに調査資料を増やして検討を進めたいが、おそらくは、中国白話小説の影響を受けた近世の読本の動詞「調」字の影響により、今日の「調」の読みに「調べる」が入るようになったのではないかと推測している。

2-2 漢書

次に『漢書』について、動詞「調」字の例を意味別に掲げる。

(1) 「整う」という意味の「調」

1 詔曰、問者陰陽不調、黎民飢寒無以保治。(卷九 元

帝 91頁下段左8行目)

2 然而陰陽未調、三光晦昧。(卷九 元帝 93頁下段右10行目)

3 三月壬戌朔日有蝕之。詔曰、朕戰戰栗栗、夙夜思過失、不敢荒寧。惟陰陽不調。未燭其咎。婁敕公卿。(卷九 元

帝 93頁下段左6行目)

4 問者陰陽不調、五行失序、百姓飢饉。(卷九 元帝 95頁上段右11行目)

1は、陰陽が整わず、人民は飢え凍えているという内容である。ここでの「調」は「整う」という意味である。2は、陰陽が整わず、三光が暗いという内容である。ここでの「調」も「整う」という意味である。3は、日蝕によって、陰陽が整わないという内容である。ここでの「調」も「整う」という意味である。4は、陰陽が整わず、五行が乱れ、人民は飢えているという内容である。ここでの「調」も「整う」という意味である。これらの動詞「調」字の意味は、全て「整う」である。ただ、例えば、前述したように「不調」は、「不調なり」という形容動詞としても読むことが可能なのであるが、「調」を動詞として読めることを前提として、例を挙げた。なお、用例のテキストとした和刻本では、「不調」「未調」を動詞として「トトノヲラズ」と読んでいる。

(2) 「整える」という意味の「調」

- 1 上帝所為伝。黄帝調律歷。(卷二十一上 律歷 238頁上段左13行目)
- 2 大農以均輸、調塩鉄。(卷二十四 食貨志第四 289頁上段右1行目)
- 3 医経者原人血脈経落骨髓陰陽表裏、以起百病之本、死生之分、而用度箴石湯火所施、調百藥肅和之所宜。(卷三十 芸文志第十 433頁上段左11行目)
- 4 如故吹律調樂。(卷四十二 張周趙任申屠伝第十二 515頁下段右3行目)

1は、黄帝が律歷を整えたという内容である。ここでの「調」は「整える」という意味である。2は、大農は均輸法をもつて、塩鉄の売買を整えたという内容である。ここでの「調」も「整える」という意味である。3は、たくさんの薬の配分を整えるという内容である。ここでの「調」も「整える」という意味である。4は、音楽を整えるという内容である。ここでの「調」も「整える」という意味である。

(3) 「調べる」という意味の「調」

- 1 爰盜詔入見上方與錯調兵食。(卷四十九 爰盜錯伝第十九 567頁上段右9行目)

1は、自国の兵食のことについて調べるという内容である。ここでの「調」は「調べる」という意味である。

(4) 「任命する」という意味の「調」

- 1 卒掌者関中不足、廼調傍近郡。(卷二十四下 食貨志第四 285頁下段左4行目)
- 2 然盜亦以数直諫、不得久居中調為隴西都尉。(卷四十 九 爰盜錯伝第十九 559頁下段右6行目)
- 3 又擅調益莫府校尉。(卷六十八 霍光金日磾伝第三十 720頁下段右12行目)
- 4 吏追捕有功上名尚書。調補県令者数十人。(卷七十 六 趙尹韓張両王伝第四十六 793頁下段右7)

1は、卒掌が関中で不足したので、近郊の軍から任命したという内容である。ここでの「調」は、「任命する」という意味である。2は、盜は直諫を繰り返したので、久しくとどまること

ができず、西都尉に任命されたという内容である。ここでの「調」も、「任命する」という意味である。3は、思うがままに莫府校尉の数を増やして任命するという内容である。ここでの「調」も、「任命する」という意味である。4は、選ばれて県令になった者が数十人いたという内容である。ここでの「調」も、「任命する」という意味である。

(5) 「演奏する」という意味の「調」

- 1 陰陽清濁穆羽和兮。若夔牙之調琴。(卷八十七上 楊雄 伝第五十七上 873頁上段右13行目)
- 2 合口、工声調於比耳。(卷八十七下 楊雄伝第五十七下 883頁下段右12行目)

1は、陰陽の聲が清濁して、細い聲がこれに和すこと、夔や牙が、琴を演奏するようであるという内容である。ここでの「調」は、「演奏する」という意味である。2は、書を著すということは、声を巧みにして、穏やかな音で演奏するという内容である。よって、ここでの、「調」も、「演奏する」という意味である。なお、「演奏する」という意味は、「(音色を) 整える」という意味にも解することができることから、「整う」という意味の「調」と見ることもできる。

(6) 「調達する」という意味の「調」

- 1 辺既空虚、不能奉軍糧、内調郡国不相及属、此二難也。(卷九十四下 匈奴伝第六十四下 948頁上段右9行目)
- 2 宜因其罪惡未成未疑、漢家加誅陰、敕旁郡守尉練士馬、大司農豫調穀、積要害処、選任職太守往以秋涼時、入誅其王侯尤不軌者。(卷九十五 西南夷両粵朝鮮伝第六十五 952頁下段左12行目)

1は、辺境の食糧が空虚なら、群国内で食料を調達することは難しいという内容である。ここでの「調」は、「調達する」という意味であると考えられる。内容としては、食料を整えるという意味にも通じるから、「整える」の意味に類似はしている。2は、大司農から予め穀物を調達するという内容である。ここでの「調」も、1と同じく、「調達する」という意味であると判断する。用例のテキストとした和刻本には、「師古曰、調、発也」とある。この「発」は、「表面に表わす」(『大字典』)の意味であろう。「調発」という熟語も存する。これは、「徴発」と同じ意味とされ、戦時中に、強制的に物資をとり立てる意味とされる。師古は、「大司農豫調穀」の内容を、大司農が予め、強制的に穀物をとり立てたと解したのであろう。

以上見てきたように、『漢書』の動詞「調」字にも、『史記』

と同様に、別義と考えられるような、複数の意味が存する。『史記』にあつて、『漢書』にない、動詞「調」字の意味としては、「演奏する」「調達する」が存する。

このように、中国の歴史書には、動詞「調」字に、日本の動詞「調」字に見られない、複数の意味が見られる。

2-3 文選

『文選』に見られる動詞「調」字には、後掲するように、「整える」「整う」「演奏する」といった三つの意味が存する。このうち、「演奏する」の意味は、音色を「整える」という意味としても考えられることから、「整える」の意味に含めて考えることが可能であることは、今まで述べてきたとおりである。

(1) 「整える」という意味の「調」

- 1 皇歆浹、群臣醉。降烟燭、調元氣。(東都賦 賦篇上 68頁2行目)
 - 2 絢大絃而雅声流、冽風過而增悲哀。於是調謳。令人憊悵悵、脅息增歆。(高唐賦 賦篇下 352頁3行目)
 - 3 玄冥適臧、蓐收調辛。(七啓 文章篇上 140頁3行目)
- 1の「元氣」とは、『大漢和辞典』(諸橋轍次著)によれば、

「万物の根本をなす氣」とある。ここでは、演奏を聞いて、天も万物の根本をなす氣を整えるという意味であろう。「調+目的語」の形を取っているから、ここでの「調」は、他動詞で、「整える」という意味である。2の「調謳」とは、謳を整えるという意味である。ここでは、神前での琴の演奏で、琴の雅な音に風の音が悲哀を増し、それに合わせて謳を整えるという内容である。「調」の意味は、「整える」である。3の「調辛」は、「辛さを整える」という意味である。したがって、ここでの「調」も、「整える」という意味である。

(2) 「演奏する」という意味の「調」

- 1 陰陽清濁、穆羽相和兮、若夔牙之調琴、(甘泉賦 賦篇中 55頁6行目)

1は、風の音が、「夔牙が琴を演奏するようである」という内容である。「調琴」とあるように、「調」は他動詞で、「演奏する」という意味である。

(3) 「整う」という意味の「調」

- 1 於是器冷絃調、心閑手敏。(琴賦 賦篇下 313頁3行)

目)

- 2 湯禹儼而求合兮、摯皐繇而能調。(離騷經 文章篇
上 27頁1行目)

1の「絃調」は、琴の絃が整う意で、ここでの「調」は「整う」という意味である。2は、湯と禹は、自分に合った人材を求め、選ばれた摯や皐との関係が整うことができたという内容である。ここでの「調」は、「整う」という意味である。

前述したように、『史記』や『漢書』では、「整える」の他に「昇進する」「任命する」といったような意味の使用例も認められた。これに対し、『文選』は、「整える」という一つの意味でしか使われていない。この結果は、恐らくは、『文選』が詩文であり、『史記』や『漢書』が歴史書であることと、関わっていると考えられる。歴史を記述するにあたっては、その内容から、「任命する」「昇進する」など、複数の意味で、動詞「調」字を使用することが必要だったと考えられる、これに対して詩文では、様々な事態での細かい描写を必要としなかったために、動詞「調」字に複数の意味を必要としなかったのではなからうか。このように、動詞「調」字の意味の多寡の現象が生ずる理由を、文章の内容の違いに求めることができるのであるが、結果的にも、中国の作品ジャンルによって、動詞「調」字の使われ方の違いが見られるのは注目すべきである。中国文献において、

動詞「調」字の使われ方は一様ではなく、詩文というジャンルにおいては、動詞「調」字を単純に使おうとする意図が存したとも考えられるのである。

さて、中国文献における動詞「調」字の意味の現れ方を日本文献と合せ考えたとき、その現れ方は、『文選』と日本文献とが同じ傾向にある。これをもって、日本文献における動詞「調」字の意味が、直接、『文選』の影響を受けたとは言えないだろうが、意味を単純に使おうとする意図は、日本語表記における漢字受容の意識としてあつたであろうことは推察される。日本の歴史書や古文書であっても、中国の歴史書と同じように、さまざまな事態の描写にあたっては、動詞「調」字を「昇進する」「任命する」といった意味で使い得る場面もあつたであろうが、日本文献においては、これらの意味の動詞「調」字の使用は避けられているように見える。この単純な意味で使おうとする意識が、日本語表記における漢字受容の根本的態度であつたといえよう。漢字表記の単純化は、読者に文意を伝えやすくするという点で、効果を發揮したといえるのではなからうか。

3 訓点資料における動詞「調」字の読み

ここでは、管見に入った訓点資料の「調」の訓読の例をもとに、訓読における動詞「調」字の読みと意味との関係について

考えてみたい。動詞「調」字の読みとしては、以下に挙げる漢語サ変動詞と和語動詞の2類に分けることができ、さらに和語動詞は「トトノフ／トトノフル」「アザケル」「シラブ」の3種に分けることができる。

I 類 漢語サ変動詞

- 1 梨園の弟子、呂律を調す【イ、ト、ノ、ヘ 又シラ
フ】(卷三 116 神田本白氏文集)^(注9)
- 2 此レ酪を調シテ生熟^コ蘇ト為ムト欲^ソシテナリ【也】(37
ウ 東大寺藏法華文句)^(注10)
- 3 此レハ是レ熟^ソ蘇ヲ調シテ醍醐ト為ス也(37ウ 東大
寺藏法華文句)

II 類 和語動詞

- a 種 「トトノフ」「トトノホル」
- 1 豈(ニ)止膏^タ《平》(平輕)育^ホ《平輕》「(上書)育^ホ
(平)」《(下欄)「ムネニ」アリ》永ク絶ユ、腰^ソ(去)理
(上)《(裏)「血脈歟」恒ニ調^トホル(ノミナラムヤ)「而
已」(9・139 興福寺藏大慈恩寺三藏法師伝)^(注11) - 2 但し、一心に法を以(て)自(ら)調へ、法に依(て)
「而」住す。(3・525 高山寺藏大毘盧遮那成仏経疏)^(注12)
 - 3 一縁に、諦に観して相「」心し、明^ミ了^リにして善^ニく心

と「及」氣息とを調^{トノヘ}へよ(4・270 高山寺藏大毘盧遮那
成仏経疏)

- 4 此(れ)が為に・大悲心を興(し)て種々の方便をも
て諸の窮子を調ふ。(8・470 高山寺藏大毘盧遮那成仏経
疏)

- 5 又信有^アル者心摂(する)こと調り易(き)が故に疾
(く)定を得(79下9 成実論天長五年点)^(注13)

- 6 微妙ノ讚歎の声を以テて、調^トヘテ功德を讃揚せよ。
(23 甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌)^(注14)

- 7 上諧^{トノホ}ルトキハ「則」氣類均(し)くし(て)調^トる、
下正^タ「シキ」ときは「則」宮(平輕)商(平)韻
切^{タシカ}「ナリ」なり(5オ62 高山寺文鏡秘府論)^(注15)

- 8 意の下レル之(を)下格と為。律は其の言を調フ、々
(言)相(ひ)妨(く)ること無し(6ウ81 高山寺文鏡
秘府論)

- 9 帳は亦第三の字(にして)是(れ)下句(の)「之」腰
なり。此(れ)調を(ととのほ)らんと為、宜(しく)
其の腰を護(去)す「宜」(し)(12ウ163 高山寺文鏡秘
府論)

- 10 賢愚に云(ハ)ク国王・象師^{サウシ}ノ象ヲ調フルヲ見テ即
チ慈心・生ス(50ウ 東大寺藏法華文句)

- 11 乃し卑小の姓等に至(る)マて、亦、下劣(の)「之」

想と嫉妬との「之」心とを懷(か)不れ、但(し)一心に法を以(て)自(ら)調(へ)て、法に依(り)て而も住(せよ) (35才 高山寺藏本大毘盧遮那經疏^(注16))

b種「アザケル」

1 其の智(アムコ)形(カタチ)嗤(ワラ)ヒ説(ト)て之(コレ)を調(アサケ)り
咲(ワラ)ふ。(228行目 石山寺藏仏説太子須陀拏經^(注17))

2 我適(ワレシバ)シ水(ミヅ)取(ト)て年少(ネンセイウ)の曹(ワラハ)輩(ハ)共(ニ)形(カタチ)タガへて我(ワレ)調(アサケ)り咲(ワラ)ふ。(232行目 石山寺藏仏説太子須陀拏經)

c種「シラブ」

1 梨園の弟子、呂律を調す「イ、ト、ノヘ 又シラフ」(卷三 116 神田本白氏文集)

2 五絃、一々に君が為に、調フ。(卷三 289 神田本白氏文集)

3 師曠律を調へ、京(キョウ)「平」房「平」姓を改むと雖(も)、伯「入」「啗」「平」か「之」残音(アム)を出し、公「平」明(メイ)か鳥語を察(スル)する。(22才301行目 高山寺文鏡秘府論)

4 豈に柱ヲ(コトチ^(ニ)) 膠ニシ(ニカハ^(ニ)「ヌリテ」シテシラ)瑟を調へ 株(クヒセ)を守(「テ」^(リ)て) 兔を伺(「ウカ、フ」^(フ)) (27才368 高山寺文鏡秘府論)

5 客ハ八(入)「□入輕」音調(平)「□平輕」ヲ調(シラ)ヘテ言(ワ)「平濁」「左」「イフ」ハ婦(朱上)(ル)「左」「カヘリ・□ムト」「之」詩ヲ詠ジ。(59頁下段 仁和寺三教指帰占点^(注18))

まず、Ⅰ類の漢語サ変動詞として読まれた例についてであるが、Ⅰの『神田本白氏文集』の例は、いわゆる本調が漢語サ変動詞読みであるのに対し、異本の調として、Ⅱ類a種の「トトノフ」とⅡ類c種の「シラブ」が併記される。「シラブ」には合点が付される。これらは、どれを第一次調とし、第二、第三次調とすべきかは判別されていないが、おそらくは、全て第一次調とみて問題なからう。とすれば、天永四年に藤原茂明によって加点されたということになる。なお、判別は、『神田本白氏文集の研究』(太田次男)によった。ここでの文意は、「呂律」を対象としているから、「整える」もしくは「演奏する」の意である。「シラブ」に合点があるから、ここでは「演奏する」の意を採用している。なぜ、サ変動詞読みに、「トトノフ」、「シラブ」の調が併記されているかは判然としないが、いくつかの家訓を併記したとみるのが妥当な解釈であろう。「シラブ」に合点があるので、呂律のような音楽を対象とする動詞「調」字の読みとしては、漢語サ変動詞として読むことは難しかったのかもしれない。用例2、3はいずれも、東大寺図書館蔵法華文句の例で

ある。加点年代は、築島裕博士により、長保頃かと推定されている。2は、酪を調理して熟蘇とし、3は、熟蘇を調理して醍醐とすという内容で、動詞「調」字の意味は、「調理する」という意味である。この2例から、「調理する」の意味の動詞「調」字は、漢語サ変動詞読みをされていた可能性があることが分かる。

このように、動詞「調」字をサ変動詞として読んだ例は、「調理する」の意味であることが分かる。

次に、Ⅱ類の用例1は、興福寺藏大慈恩寺三藏法師伝で、動詞「調」字を、「トトノホル」と読んだ例である。1の「調」は、「整う」ことによって長続きする」という意味であろう。ここでの動詞「調」字は、自動詞の用法である。

2、3、4は、高山寺藏大毘盧遮那成仏経疏で、「トトノヘ」「トトノヘヨ」「トトノフ」と読んだ例である。活用語尾だけを加点した例は、「シラブ」の読みの可能性も生じるが、いずれの例も対象が音楽に関する内容ではないので、ここでは、「シラブ」の読みは当たらないであろう。2の動詞「調」字の意味は、「整える」である。3は、ヲコト点の「ヘヨ」の他に仮名で「ト、ノヘヨ」とある。築島博士の解説によれば、ヲコト点は永保頃の点で、仮名は十一世紀から十二世紀にかけて施されたものとされる。動詞「調」字の意味は、「整える」である。4の動詞「調」字の意味も、「整える」と考えてよい。すなわち、こ

では、窮子の乱れた状態を大悲心をもって整えるというのである。

5は、成実論天長五年点の例である。鈴木氏の訓読では、「調り」としかないが、おそらく「トトノホリ」と読むであろう。ここでの動詞「調」字の意味は、「整う」という自動詞である。

6は、甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌康和点の例で、「トトノヘテ」という仮名がある。動詞「調」字の意味は、「整える」という意味であろうか。ただし、その場合、「整える」対象は、心になろう。あるいは、ここが、朱書された、「調」を「誦」の誤りとする説に従うべきであるかもしれない。そう考えたほうが、文脈の意味を理解しやすい。対象を仮に「讃歎の声」とした場合には、「トトノヘテ」と訓ずるよりも、「シラベテ」と訓ずる方がよいであろう。この点で、「調」ではなく「誦」であったという朱書の記述に従うべきであろう。

7、8、9は、高山寺文鏡秘府論の例で、それぞれ「フ」「ラ」とのみ記されている。高山寺文鏡秘府論は、月本雅幸氏の説によれば、長寛三年の書写である。7は、上の句が整うときは、気類が均しくなるという内容である。用例中の「正」と「調」が対応し、いずれも「整う」という意味である。ここでは、自動詞として「トトノホル」と読む。8の動詞「調」字は、言を対象とし、「整える」の意味である。用例中に、「相(ひ)妨(く)ること無し」とあるように、言を整えれば、それ

ぞれの句がお互いに妨げあうことがないという内容である。9は、上の句の第三字目は下の句の腰に当たるので、「整うようにして、その腰を護るのがよい」という内容である。ここでの動詞「調」字の意味も、「整う」という意味である。このように、高山寺文鏡秘府論では、「整う」の意味では「トトノホル」と読み、「整える」の意味では「トトノフ」と読んでいる。

10は、東大寺藏法華文句の例である。動詞「調」字の対象は象で、象師が象を「整える」という内容である。所謂、調教する意であるが、象の乱れた状態を整えるので、「整える」という意味に解することができる。

11は、高山寺藏本大毘盧遮那経疏の例で、「ノヘテ」としか付されていないが、「トトノヘテ」と読んだと考えてよからう。「トトノフ」の対象は、嫉妬などの乱れた心で、それを「整える」という内容である。

以上、Ⅱ類a種の「トトノフ」「トトノホル」の訓を見てきたが、動詞「調」字が「整える」の意味の場合は「トトノフ」と訓じ、「整う」の場合は「トトノホル」と訓じていることが分かる。

次に、Ⅱ類b種の「アザケル」の訓について検討する。本論文冒頭に掲げた『字統』に「その和適の状態が過ぎると、多言となり、調笑となり、調諍となつて、嘲弄の意となる」とあるように、動詞「調」字には、「アザケル」に相当する意味が存す

る。

1、2は、年少の曹輩が、婦人の婿を嘲り笑うという内容で、これらの動詞「調」字の意味は、「嘲る」という意味である。動詞「調」字の意味によって「アザケル」と訓じている。

次に、Ⅱ類c種の「シラブ」の訓について検討する。

1の例は、先にⅠ類のサ変動詞の例として、用例1に示した例である。前述したが、異本をもとにサ変動詞とは別の読みを示した例と見られる。特に、「シラブ」に合点が付されていることは注目される。すなわち、異本によれば、ここでは、「トトノヘ」よりも、「シラブ」の訓を採用すべきとしていることになる。ここでの動詞「調」字の対象は、「呂律」である。音楽を対象とする場合は「シラブ」が適しているとの判断によるのであろう。2の例の動詞「調」字の対象は、五絃である。ここでの「調」の意味は、「演奏する」である。3の例の対象も「律」で、動詞「調」字の意味は、「演奏する」である。4の例の対象は「瑟」で、動詞「調」字の意味は、「演奏する」である。5の例の対象は「八音」で、動詞「調」字の意味は、「演奏する」である。「八音」とは、仏教に関わる八楽器であり、ここでの「調」は、それらを演奏することを言う。このように、「シラブ」と読まれる動詞「調」字は、「律」や「瑟」「八音」を「演奏する」という意味である。

以上述べてきたように、訓点資料の動詞「調」字は、その意

味の違いに応じて、読み分けられている。すなわち、「調理する」の意味では漢語サ変動詞に読み、「整う」の意味では「トトノホル」、「整える」という意味では「トトノフ」と読み、また、「嘲る」という意味では「アザケル」と読み、さらに、「演奏する」の意味では、「シラブ」と読んでいる。

4 和文資料の「てう(調)ず」との関わり

さて、最後に、漢語サ変動詞「てう(調)ず」について、考えておきたい。言うまでもなく、「調ず」は語として考えるべきであって、動詞「調」字の表記上の意味と、直接結びつけて考えることには慎重にならざるを得ないが、語とはいっても、動詞「調」字の字義にもとづいて「調ず」は生まれたと考えられるので、今まで見てきた動詞「調」字の意味と関わせて、若干、考察を加えておきたい。

さて、サ変動詞「調ず」は、和語を基調とする『源氏物語』においても、比較的、多くの用例を見ることができる。『源氏物語』を対象に、「調ず」を意味によって分けて示すと次のようになる。^(注19)

(1) 「仕立てる」という意味

1 よろづの御よそひ何くれとめづらしきさまに調_レ出でたまひつつ (①帚木 54頁6行目)

2 忍びて調_レぜさせたまへりける装束の袴をとり寄せさせたまひて (①夕霧 192頁12行目)

3 旅の御宿直物など調_レじて奉りたまふ。(②須磨 190頁9行目)

4 例はさしも睦びぬを、誘ひたてむの心にて奉るべき御装束など調_レじて、よき車に乗りて、面もち気色ほこりかにも所思ひなげなるさまして (②蓬生 338頁5行目)

「仕立てる」という意味の「調ず」は、『源氏物語』に、前掲の4例を含めて8例見られる。これらの「調ず」は、全て「装束」を目的語として使用されている。これらの「調ず」の意味を、「仕立てる」としたが、いまだ少し細かく説明すると、「仕立てる」という意味には、「作る」という意味、「整える」という意味、「用意する」という意味、「飾り立てる」という意味、「繕う」という意味なども含んでいる。これらの複雑な行爲を総合した意味が、「調ず」の、「仕立てる」という意味であろう。つまり、「調ず」は、公式行事への参列や贈答など、宮廷人の生活にとって欠くことのできなかった装束を「仕立てる」という行

為を、専門的で特殊な行為として捉えた結果、「つくろふ」ととのふ」などの他の和語動詞では表現できない意味を、漢語を使って表現していると考ええる。

それでは、この「仕立てる」という意味が、動詞「調」字の意味と、どのようにかわるのであろうか。

先述したように、動詞「調」字には、別義とも考えられるような多数の意味があり、その中に「整える」「調達する」という意味が存する。「調ず」の、「仕立てる」の意味は、動詞「調」字の複数の意味のうち、この「整える」「調達する」という意味が活かされていると考えられ、この点で、「調ず」の意味と動詞「調」字の意味の間には、関連性が認められる。

ただし、動詞「調」字に、「仕立てる」という意味自体は見られない。この点で、「調ず」の意味と、動詞「調」字の意味とが、完全に合致するわけではない。また、目的語からみても、「仕立てる」という意味の「調ず」の目的語が装束に限定されるのに対して、動詞「調」字の「整える」「調達する」の目的語は、「氣」「音楽」「味」「食料」など、多種多様であり、装束に限定されるわけではない。このように、『源氏物語』のような和文資料に見られる「調ず」の意味は、動詞「調」字の意味と関わりを持ちながらも、むしろそこから離れて、専門的で特殊な意味を表す語が必要となり、日本で独自に作られた語であったと考えられる。このようにみると、先に述べたように、漢文におけ

る動詞「調」字の訓読から、直接「調ず」という語が生まれたということとは考えにくい。

(2) 「調理する」という意味

5 親しき殿上人あまたさぶらひて、西川より奉れる鮎、近き川のいしぶしやうのもの、御前にて調じてまゐらす。

(3) 常夏 223頁4行目

6 太政大臣仰せ言賜ひて、調じて御膳にまゐる。(3) 藤裏葉 460頁6行目

7 このたび足りたまはむ年、若菜など調じてやと思して(4) 若菜下 179頁14行目

8 よしある御くだもの召し寄せ、また、さるべき人召して、ことさらに調ぜさせなどしつつ(5) 宿木 412頁10行目

前掲の用例5～8は、「調理する」の意味で使用された「調ず」の例である。この「調理する」の意味も、「仕立てる」の場合と同様、目的語は「魚」「若菜」などの食材に限定される。5に「まゐらす」とあり、6に「御膳にまゐる」とあり、8に「ことさらに」ともあるように、「調理する」という意味を表す「調ず」は、仰々しく格式ばった行為であり、宮廷生活で行われ

る特殊な料理を作る行為を表すと考えられる。「仕立てる」という意味を表す「調ず」と同様に、宮廷人の生活にとって欠くことのできなかつた「調理する」という行為を、専門的で特殊な行為として捉えた結果、「トトノフ」「ツクル」「アツラフ」などの、通常の日常生活での料理を作る行為を表し得る和語動詞では表現できない専門的で特殊な意味を、漢語を使って表現していると考ええる。

さて、「調ず」の「調理する」という意味が、動詞「調」字の意味と、どのように関わるかということについて考えてみたい。訓点資料を対象とした考察のところで述べたように、動詞「調」字には、「調理する」という意味が見られる。訓点資料では、この意味を表す動詞「調」字を、サ変動詞で読んでいる。このことと考えると、「調ず」の「調理する」という意味は、動詞「調」字がもつ、複数の意味のうち、「調理する」という意味だけを、直接、反映していると言えるかもしれない。しかしながら、「調ず」の「調理する」の意味には、宮廷での特別な行事としての「調理する」という行為を表すという、専門的で特殊な意味が付与されており、この点、『源氏物語』の「調ず」の特質が認められると言ってよいであろう。

(3) 「調伏する」という意味

- 9 いみじく調ぜられて(④若菜下 235頁3行目)
 10 おのを、月ごろ、調じわびさせたまふが情なくつらければ(④若菜下 235頁4行目)

- 11 まださるべきほどにもあらずと皆人もたゆみたまへるに、にはかに御気色ありてなやみたまへば、いとどしき御祈禱数を尽くしてせさせたまへれど、例の執念き御物の怪一つさらに動かず、やむごとなき験者ども、めづらかなりとても悩む。さすがにいみじう調ぜられて(②葵 38頁6行目)

- 12 月ごろ、いささかも現はれざりつる物の怪、調ぜられて(⑤手習 294頁14行目)

前掲の用例9～12は、「調伏する」の意味で使用された「調ず」の例である。「調伏する」の意味で使用された「調ず」は、この他に、『源氏物語』に2例見られ、計6例である。この「調伏する」の意味も、目的語は、人に憑りついて害を及ぼす「物の怪」という、特定の目的語に限定される。

訓点資料において、動詞「調」字の単字での意味に、「調伏する」という意味で使用された例は、いまだ見出し得ていないが、「調伏」という二字熟語では、次のような、動詞としての使用例

が存する。

- ・ 熱惱を「於」調伏し（小川本願經四分律古点 66・5）^{（注20）}
- ・ 調伏せ令む使へシ（蘇磨呼童子經 上4才）^{（注21）}

このように、「調伏」の例は、中国の仏典資料に散見される。ただし、先述したように動詞「調」字に「調伏する」の意味で用いた例を、中国文献や日本文献に見出すのは難しい。この状況からみると、「調伏する」の意味を表わす「調ず」は、中国の仏典資料に見られる、「調伏す」を略した語として成立したとも考えられる。しかし、中国の仏典資料の「調伏」は、内外の悪を降伏するという専門的な意味が存するのであって、中国仏典の「調伏」が直接、『源氏物語』に見られる「調伏する」の意味を表す「調ず」に、「調伏す」の省略形として、結びついていても考えがたい。『源氏物語』の「調ず」は、宮廷人に憑りついた物の怪を、「やむごとなき験者」の祈祷によって追い払うという、宮廷人にとって必須であり専門的な行為を意味すると言えらる。その点で、漢語の表意性によって、和語動詞では表せない意味を補ったと考えられる。このように考えると、「調ず」は「仕立てる」「調理する」と同様に、動詞「調」字の意味の一つである「整える」という意味と関わりを持ちながら、日本で作られた語であった可能性も考えられる。「調ず」の「調伏する」

の意味も、相手の乱れた状態を整え正常にすることと考えれば、「整える」という意味と全く異なるわけではない。このように、「調ず」の成立は、訓点資料での「調」字の読みや、「調伏」の読みとは、直接には結びつかないと考えられる。

付言すれば、僧侶や験者が祈祷によって物の怪を追い払う行為、さらには、先述したように、料理人が神前で調理する行為、さらびやかな布から美しい布を作り上げていく行為は、いずれも、特殊で神聖な力を有する者のみによってなされる行為とみなされていたのではなかったか。「調ず」とは、日常の振る舞いとはかけはなれた専門的で特殊な行為を表現する語として、存在価値を有していたのではなからうか。このような状況から、和文で使用される「調ず」は、中国の古代作品や、訓点資料を介して生産されたのではなく、当時の貴族や女官たちの口頭語の中から生まれた語だった可能性も見えてくる。仏前や神前で物の形を変えらるという神聖な力に対する畏怖の念が、「調ず」というサ変動詞に込められているとみたい。そしてこのことは、和文を基調とする『源氏物語』に漢語が使われる理由としても、敷衍して考えることができるように思われる。

おわりに

以上、動詞「調」字の受容という観点から、日本の古代に少

なからず影響を与えた中国の古代文献を対象に、動詞「調」字の意味を探り、その意味と比較しつつ、日本の上代文献、更には中古の古文書や古記録の動詞「調」字の意味を検討した。さらに、漢語サ変動詞「てうず（調ず）」の成立過程についても言及した。

結果として、日本における動詞「調」字の意味は、中国の動詞「調」字の意味をそのまま引き継いでいるわけではないということが分かった。中国の古代文献に見られる動詞「調」字の意味のうち、「調べる」「任命する」「徴発する」「調達する」などは、日本の上代文献や、古文書や古記録では使われていない。日本の古文書や古記録では、「整う」「整える」の意味の動詞「調」字が圧倒的に多く、他は「演奏する」という意味での使用例がわずかに認められるのみである。中国では多数存した動詞「調」字の意味を、日本では三つ程度に限定したことは、表記上の工夫であったはずである。

『源氏物語』に見られるような漢語サ変動詞の「てうず（調ず）」は、訓点資料の影響を直接受けて生じたものではなかったと結論づけた。『法華文句』に、「調理する」の意味の動詞「調」字を「調ず」と読んだ例はあるが、これのみをもって、「調ず」の成立を訓点資料に求めるのは難しい。「てう（調）ず」が表す意味の一つである「仕立てる」という意味の動詞「調」字は、中国古代文献にまだ見出し得ていない。さらには、訓点資料

に「調伏す」というサ変動詞は存するが、「調伏する」という意味を表わす動詞「調」字や訓点資料で「調ず」と読んだ「調伏する」の意味を表わす動詞「調」字の例をまだ見出だしていない。また、日本の古文書や古記録から、「調理する」「仕立てる」「調伏する」という意味を表わす動詞「調」字の例を見出だし得ていない。このことから、中国文献の動詞「調」字の用法をもとに、漢文の訓読を経て、「調ず」が生まれたというわけではなかったのではないかと推察する。おそらくは、動詞「調」字の持つ「整える」という意味に基き、専門化、特殊化させたのが漢語サ変動詞「てうず」ではなかったかと考える。「仕立てる」ことは、そもそも「着物を整える」という行為であるし、「調理する」ことは、食材に手を加えて「味を調える」という行為である。「調伏する」ことは、物の怪等が憑りつくことによつて乱れた人間の状態を、「整える」という行為である。ただし、「整える」という意味を含めば、すべて「てう（調）ず」で表せるかというところではない。例えば、動詞「調」字の意味の一つである「演奏する」は、「整える」という意味として考えることもできるが、「てう（調）ず」に「演奏する」という意味はない。「てう（調）ず」は、日常の振る舞いとはかけはなれた専門的で特殊な行為を表現する語として、類義の和語動詞とは異なる存在価値を有していたと結論づけたい。

注

- (注1) 白川静『新訂 字統』(二〇〇七年 平凡社 628頁) 引用中の*は、『字統』で見出し字として収録されていることを示す。
- (注2) 『色葉字類抄 研究並びに索引』(中田祝夫 峯岸明共著 風間書房 一九六四) による。それぞれの読みの所在箇所は、次のとおりである。論文中の濁点は私に施した。
- ト、ノフ ト辞上114/ツククロフ ツ辞中542/エラフ エ辞下321/アフ ア辞下675/シタ、ム シ辞下1547/シラフ シ辞下1522
- (注3) 用例は、『古事記』(小学館 二〇〇三年 山口佳紀 他 校注・訳) による。
- (注4) 用例は、『日本書紀』(小学館 一九九四年 小島憲之 他 校注・訳) による。
- (注5) 用例の検索は、東京大学史料編纂所のホームページの古文書と古記録のフルテキストによった。旧漢字は適宜、新字体に改めた。
- (注6) 『史記』における動詞「啓」字の検索は、漢籍電子文献のホームページを使用した。また、本文は、新釈漢文大系(明治書院 一九七三・二〇一四) によった。
- (注7) 『漢書』における動詞「啓」字の検索は、漢籍電子文献のホームページを使用した。また、本文は、和刻本正史3・4(汲古書院 一九七三) によった。
- (注8) 『文選』における動詞「啓」字の検索は、国訳漢文大成 文選上・中・下の本文を筆者が通読する方法によった。本文は、新釈漢文大系(明治書院 一九六三・二〇〇一) によった。
- (注9) 『神田本白氏文集の研究』太田次男 小林芳規著 勉誠社 一九八二
- (注10) 『東大寺法華文句』(田淵雅生 訓点語と訓点資料 87輯 一九九一)
- (注11) 『興福寺本大慈恩寺三蔵法師傳古點の国語学的研究』築島裕

著 東京大学出版会 一九六五・一九六七

- (注12) 「高山寺藏大毘盧遮那成佛經疏永保点 本文篇」(『高山寺古訓点資料 第三』高山寺典籍文書綜合調査団 東京大学出版会 一九八六)
- (注13) 「東大寺図書館藏 成実論卷二十一天長五年点」(鈴木一男 訓点語と訓点資料 第八輯 一九八一)
- (注14) 「西南院本 甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌 康和点併解説文(四)」(曾田文雄 訓点語と訓点資料 第24輯 一九六二)
- (注15) 「高山寺藏文鏡秘府論の訓点―訳文・天卷―」(月本雅幸 訓点語と訓点資料 第82輯 一九八九)
- (注16) 「高山寺藏本大毘盧遮那經疏卷第三康和五年点釈文(二)」(築島裕 訓点語と訓点資料 第91輯 一九九三)
- (注17) 「石山寺藏石山寺仏説太子須陀婆經平安中期点」(小林芳規 松本光隆 鈴木恵「訓点語と訓点資料」 第七十一・七十二輯合併号 一九八四)
- (注18) 「仁和寺宝藏三教指帰古点釈文」(築島裕 小林芳規 他 訓点語と訓点資料 九十七輯 一九九六)
- (注19) 本文は『新編日本古典文学全集 源氏物語』(小学館 一九九五) により、振り仮名等は、私に適宜改めた。
- (注20) 「小川本願經四分律古點」(大坪併治「訓点語と訓点資料 別刊 第一」一九五八)
- (注21) 「仁和寺藏本蘇磨呼童子請問經承暦三年點譯文」(築島裕 他「訓点語と訓点資料」一九九五)